

---

# ジュエル！

asobito

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ジュエル！

### 【Nコード】

N5166Z

### 【作者名】

asobito

### 【あらすじ】

オレの名前は一条<sup>はじめ</sup>初。下校途中外国人の美女が車に轢かれそうだったので助ける為道路に飛び出したとこまでは覚えてる。でも気が付けば赤ん坊に、しかもその美女が母親！？え？オレ人間じゃないの！？地球ではない異世界で新たな人生を歩むことになったハジメの物語。

素人の初めての執筆なので色々問題が出てくること必至ですが、完結できるよう頑張ろうと思います。誤字脱字その他気になったところがありましたら教えてもらえると助かります。

## プロローグ

オレの名前は一条初<sup>はじめ</sup>。田舎町に暮らす普通の高校2年生。外見は中肉中背で顔は・・・まあ中の下くらいなんじゃないかな。可もなく不可もなくって感じ。勉強も運動もそつなくこなすタイプ、飛び抜けてなにか才能があるわけでもないのだから友人からは「器用貧乏」とか言われたりもするが。まあ「どこにでもいる普通の高校生」とってというのが一番わかりやすいか。趣味は映画鑑賞、ゲーム、友人達と旅行に行ったりするくらい。

両親はオレが中学の時に事故で他界。それから親戚の叔父さんの所に世話になってたけど高校に入って一人暮らしを始めた。叔父さん達に世話になりっぱなしも気が引けるといのが一番の理由かな。親の残してくれたお金があるけど将来の為にできるだけとっておきたいのでバイトをして生活の足しにしている。金銭的なこともあるし、高校卒業後はどこか就職するかなあと大雑把な将来設計を考えてる。

そんな高校2年生の秋にその設計を根本からぶち壊す出来事が起きる。

「いや、マジでシャレにならん・・・。」

「まあ自業自得ってやつだな。補習がんばれ。」

下校途中のオレの横でこの世の終わりみたいに顔を青くしているのは親友のサイトー。原因は先週やったテストが壊滅的で明後日から補習が盛り沢山になったことだ。周りがテストだ勉強だって言うてる時に連日徹夜でゲームしてクリアしたことを自慢してたバカにつける薬はない。まさに自業自得だ。

「はあ、めんどくせー。ん？あ、そうだ今日新刊でるんだった。わりいちよつと待っててくれ！」

本屋の前を通り過ぎようとしたらそう言ってサイトーは本屋に駆け込んでいった。アイツがマンガ以外読んできたと見たことないしきつとマンガ買いに行ったな。ツッコミたい事はあるがいつものことなのでもう諦めている。また周りでアイツの勉強のフォローすることになんのかなあど溜息を吐きつつ何気なく周りを見渡す。

「ん？外人か、あの人。」

横断歩道のど真ん中に金髪の美女が突っ立っていた。ちょっと離れている上にこちらからは横顔しか見えないが明らかに美女だ。服装は質素な白いシャツとグレーのロングスカートで着飾ってる感じじゃない。美女はまったく動こうとしない。

「あれ、まずくないか・・・。」

危ないことを知らせた方がいいかと歩き出す、すぐに歩行者信号が点滅し赤になる。それでも美女は動かない。車道をみると車が交差点向かって走ってくるのが見える。スピードを下げるわけでもクラクションを鳴らすわけでもなく何事もないように交差点を通り抜けようとする。

「マジか！？くっそ、間に合うか！？」

全速力で横断歩道に向かう。車はすぐそこまで来ている。横断歩道に飛び込み美女をこちらに引き寄せようと手を伸ばすが空を切る。

「は？」



## ブログ（後書き）

はじめましてasobittoです。

とりあえずブログはできたので投稿してみようと思います。続きも形になり次第という見切り発車もいいところですが楽しんでくれる人がいたら幸い。

## 初の終わり ハジメの始まり

暗闇の中フワフワと浮かんでいる感覚。体は全然動く気配がせず意識もボンヤリした状態。ただ心地の良い温もりに包まれている。

(オレたしか車に轢かれたんだっけ……。)

思い出そうとしても頭が働かない。

(轢かれた瞬間意識飛んだからよくわからんが、やっぱり重症なのかな。あーダメだなんか眠い……。)

しばらくするとまた意識が戻り少しだけ考え事ができる。

(オレどれくらい入院するんだろ……。1年くらい学校行けなかったりするのかな。そういやサイトーのやつ補習どうなったかな。あー、そんだけ休んだらオレ留年じゃないか？うわ、最悪だ……。)

そんなことを考えているとまた激しい睡魔に襲われて再び眠る。それからどれくらい経ったか、急に包んでいた温もりごと激しく体が揺さぶられる感覚に襲われた。どこかから声が聞こえる気がする。それも何人もの声。

(なにか聞こえるけどなにがおきてんだ。ん、なんか押し出される感じが……。え、ちよつと誰だ引っ張ってるのはっ！？うおっ！！)

「さあ！奥様！もうひと踏ん張りですよ！頭が見えてきました！！」  
「がんばれ！もうひと踏ん張りだ！よし、なにかオレにできること

はないかつ!!」

「なにもありません!というかそこ邪魔です!!奥様を励ましてくださいっ!!」

「む!そうだな!そういうことならば全力で励ますことにしよう!」

「~~~~~!!」

温もりから引きずり出され急に明るい場所に出された。あまりの眩しさから目がくらんでいたが次第に視界が広がっていく。目の前には40くらいのおばさんがいた。首と腰あたりを支え持ち上げられると同時に歓喜の声を上げる。

「奥様!生まれました!男の子ですよ!!」

ここにきて初めて自分の状況を理解する。ありえないとしか言いようがないが自分が今生まれたばかりの赤ん坊だと気付いた。

(ええええええええええええええええええええええ!!)

声に出そうと思っても出てくるのは鳴き声だけだった。赤ちゃん特融のあの泣き声。

「おお!元気な泣き声じゃないか!これは将来が楽しみだな!」

「旦那様は気が早すぎますよっ。さ、奥様お抱きになってください」

赤ちゃんを抱き満面の笑顔を向ける女性。優しさに満ち溢れている母親の顔を見て初はさらに驚愕する。その女性は横断歩道で立っていた金髪の美女だった。

(はあああああああああ!?)

もちろんこの声も鳴き声でしかない。周りから見れば元気に泣く  
生まれたての赤ちゃんだ。

「ふふ、私があなたのお母さんよ。これからよろしくねハジメ。」

そういつてハジメの頬を指先でそつと撫でる。だが本人はあまり  
の驚愕にそれどころではなかった。しばらく泣いていたが、また睡  
魔に襲われ眠りにつく。それを大人たちは笑顔で見つめていた。

## 初の終わり ハジメの始まり（後書き）

まとめてプロローグにすればよかった気がしなくてもない。生まれ  
てくる赤ちゃんがどういう感覚なのかは想像です。

## 0～3歳児の考察と衝撃の事実（前書き）

2011/12/19 家政婦の2人がさん付けだったので直しました。

### 0〜3歳児の考察と衝撃の事実

驚愕の誕生から数週間。まだ身動きは取れるはずもなく小さなベツドの中でゴロゴロする日々を過ごす。生まれた時より物事を考えられるがすぐに眠くなってしまふのは脳がまだ発達してないからだろう。いわゆる食っちゃ寝生活だがとりあえず現状を把握するべく小さな脳をフル活動させる。

（まず現状としては、オレは今赤ん坊だ。ってことはあの事故でオレは助からなかったってことなんだろうか。でもなんであの女の人が無事な上にオレの母親なんだ・・・さっぱりわからん。それにここはどこなんだ。洋風な家の作りみたいだし、あの両親もどう見ても外人だよな。ここって外国なのだろうか。）

そんなことを考えながら周りを見渡す。木造建築の素朴な部屋。今寝ているベツドは木製だし近くに置いてあるおもちゃも木と布しか使われてない。がんばってベツドの端まで行って床を覗き込んだが木の板を並べただけ床だった。ここまで徹底した木造建築は田舎町に住んでいたハジメにも珍しいものだった。

（まったくコンクリートとか使っていないのか。どんだけ田舎なんだここ・・・。）

かなり年季のかかった感じのする家だが決して汚いわけではない。家政婦の人が毎日掃除しに来ているのを確認済みだった。家政婦の一人で10代くらいのかわいらしい女性が掃除の合間にやたらとハジメの所にきてかわいいかわいらしいと頬や頭を触ってきた。初めは嬉しかったりしたが、さすがに部屋の掃除中10分間隔くらいで来るのはストレスが溜まりそうだった。3日目に他の家政婦に見つかった

て怒られていたのでストレスが溜まることはなかった。

（家の事はこれ以上わかんならん。もうちょっと成長して歩けるようになってないと・・・。）

そんなことを考えていると部屋に女性が入ってきた。

「あら、ハジメまた動き回ったのね。まだ数週間でこれだけ動き回るなんて大きくなったらわんぱくな子になっちゃうのかしら。」

そう言いながら顔を覗き込みそっと頬をなでる。生まれた時から変わらない優しさに溢れた笑みを浮かべハジメを見つめる。

（名前はクラウさん・・・だったか。自分の母親にさん付けもどうなんだろう。）

身長は170cmくらい。髪は金髪で細身の体だが出るところは出ているモデルのようなスタイルだった。顔も整っておりじつと見つめる黒い目が意志の強さを物語っている。まさに美人と言って何の問題もないだろう。母親とはいえそんな外人モデルのような人が至近距離で笑顔を浮かべ顔をなでてくるのだからハジメは内心落ち着かない状態だった。

（自分の母親に緊張してどうするオレ！）

赤ちゃんなのに緊張で固まっていたが、抱きかかえられて子守唄（まったく知らない歌）を聴かせられたハジメは速攻で眠りについた。

「やあ！只今帰ったよ！」

爽やかな大声にふと目を覚ますとすぐにドアを開けて父親が入ってきた。名前はオルタス。身長は180cmくらい、サツパリ整えた短めの髪で色は目と同じく黒。掘りも深くキリツとした男前だった。体格は細身だが筋肉がしっかりとついていて細マッチョという感じだった。ハジメを確認するとサツと抱き上げクルクル回りだす。赤ちゃんのハジメには若干早すぎたので恐怖の為に体を強張らす。だがオルタスは嬉しくて仕方がないのかそのままジャンプまでしようとする。

「さあ高い高いもセツトだ！今なら低い低いもセツトで高低差が倍だぞー！」

そう言って回転を維持しつつしゃがんだ状態から立ち上がって頭上まで持ち上げようとするオルタスの肩に後ろから手が掛りピタッと動きが止まる。

「アナタ、なにをやってるんですか？」

「あ、クラウ、ちょっとハジメを楽しませよ・う・と。」

振り返ったオルタスがピタリと止まる。ハジメからはクラウの姿は見えないが明らかにオルタスが動揺しているのがわかる。すぐにハジメをベッドに戻し反省を口にする。

「すまない。ハジメの顔を見たらうれしくなっつてつい張り切ってしまった。」

「まあ気持ちはわからないではないですが……。まだ赤ちゃんのですから気を付けてもらわないと困ります。」

「そ、そうだな。まだ早かったな。」

（あ、いつかやるんですね……。）

あのテンションの上がりっぷりからその日がそう遠くないと不安に駆られるハジメだった。

それからしばらく過ぐすと母のクラウに抱かれ、部屋の外出ることも多くなった。そうなると両親以外も家の中に数人いることがわかる。父と母の身の回りのことをしている男性。名前はラウスペムス。両親はラウって呼んでる。オールバックにした白髪に細面、細く鋭い目で色は黒。眉は白で口と顎には白い髭。一見年寄にも見えるが40歳くらいだろう。服装はまさに執事。言葉使いも丁寧で立ち振る舞い、仕事っぷりも含め（赤ちゃん目線だが）絵に描いたような執事だった。

次に家政婦2人。ふくよかな女性の方が名前をモルヒラ。ハジメが生まれるときに産婆をしていたのも彼女だ。もう一人がヒルエ。見た目は10代前半、小柄でまだ少女の幼さが残っている。2人は親子で髪と目は茶色、モルヒラは髪を団子状に纏めていて、ヒルエは後ろに束ねている。身長は2人とも160cm前後というところだろう。モルヒラが主に仕事をしていてヒルエはそのサポートをする見習いのようなものだった。家族3人に対して執事と家政婦2人とはどういふことなのだろうと気になったが言葉を喋れないので当分保留することになった。

家には庭もありテラスもあつたのでそこで外の景色を楽しめた。見渡す限り森だったが。そして庭先にありえないものを見つける。馬車だった。しかも引いてる馬が見たこともない馬だった。全身が黒っぽく目が赤く、鬣が風もないのにゆらゆら揺らめいていた。火が燃えてるように。ここでハジメは自分の置かれた状況に確信を持つ。

（これは・・・地球じゃないな。地球上の生物すべて知っている訳じゃないが、鬣が黒く燃えてる馬なんて存在しないのはわかる！）

馬を凝視するハジメを見て「お馬さんかっこいいねー」とクラウドは嬉しそうに頭を撫でた。

3歳になり今では自分で立つて歩けるようになった。高校生だった初の頃の感覚で歩こうとするとすぐ転んでしまうのでゆっくり歩くようにする。本人は慎重に歩いているようでもフラフラしている様に大人には見えるので後ろにはいつもクラウドか家政婦が付くようにしていた。喋ることも問題なさそうだが、普通の子供は何歳から喋るようになるのかをよく知らなかったので大人達が話しかけてくるのを片言で返事するところから始めてみた。両親を騙しているようで少し罪悪感を感じたが、いきなりペラペラ喋りだす子供にいい印象はないだろう。最初に言葉を発した時は両親が大喜びで父から「高い高いデラックスく（ハジメ命名）」を10回連続でされた。この頃には何度も受けて耐性も付いたので最初ほど恐怖はないが、年々回数が増えジャンプの高さも上がっているものでどうにかしないといけないと新たな問題に悩んでいた。両親以外も言葉を覚えさせる意味合いでよく話しかけるようになった。

ラウ（自分の事をラウと呼ぶように言っていた）は両親を「父上」「母上」と呼ぶ事や家にある色々な物の名前を覚えてくれた。あと何も無いところからカップやスプーンやお菓子を出すマジックを見せたりしてくれて楽しませてくれる。モルヒラは子供の扱いには慣れていたので小さい子供をあやす典型的なおばさんスタイルでさすがに高校生にそれは無いだろと思う事でも見た目3歳児のハジメは嬉しそうにキャッキヤ言うしかなかった。ヒルエは下にまだ幼い弟妹がいるのでその感覚で接してくれた。一緒に庭に出て花や木を見たり一緒に遊んでくれたりした。

見たり聞いたりする事が増えたおかげでさらに色々な事がわかってきた。この家の周りは森になっているがすぐ近くに村がある事。モルヒラとヒルエもこの村で暮らしている。村自体にはもう何度か行ったこともあった。両親に連れられて散歩がてら村を見て回ったりしたからだ。石や木で作られた家が8軒ほど井戸を中心に並んでいた。ニワトリが放し飼いにされていたり牛がつながっていたりしていたがどの生き物も微妙にハジメの知っているものとは違っていた。人々が着ている服は質素でアクセサリやオシャレとは無縁という感じだった。そして何より驚いたのが住んでいる村人だった。普通の人間の他にトカゲのような顔をした人や耳のとがった人、犬の顔をした人、髪や目の色も多種多様だった。ハジメは過去に見た映画やゲームの世界観を思い出した。多少の誤差もあるがあのフィクションの世界が目の前に広がっていた。

（ここはファンタジーな世界なんだな……。生活も映画で見た中世とかそんな感じだしな。）

村人はみな楽しそうに生活していてクラウとハジメが通るの見かけるとお辞儀したり、ハジメに笑顔で手を振ってくれた。ハジメもそれに手を振って応えた。

あと驚いたのは父オルタスがここの村長だということだった。それはオルタスと来たときに村人がオルタスを「村長」や「村長様」と呼んでいたからわかった事だった。つまりクラウは村長夫人、ハジメは村長の一人息子ということになる。村人が楽しそうに暮らしているのは父は優秀な村長なのだろう。ハジメは改めて父を尊敬するようになった。

家で母と過ごしている時にずっと気になっていいる事を思い切つて聞いてみる事にした。生まれた時から気になっていいた事。3歳でそんなこと聞いて大丈夫か不安だった。が片言で聞いてみる。

「なんで、なまえ、ハジメ？」

「ん？なんでハジメって名前になったか知りたい？」

クラウは微笑みながら首を傾げる。ハジメはコクコクと頷く。

「ある日ね、急にどこかからラツパの様な音が聞こえてきたの。それと同時にハジメ！って声が響いてきたのね。でも周りには誰も見当たらないしおかしいなあと思つてたのね。でも次の日お腹に赤ちやんがいる事がわかつて、あああれは神様の声だったんだって思つたの。だから生まれた子の名前はハジメにしようと思つたのよ。」

その説明を聞いてハジメは目が点になり思考が止まってしまった。

(ラツパの音つてもしかしてクラクションか？ってことはハジメ！  
って声はサイトーか・・・。)

「ん〜ハジメには難しかったかなあ？」

キョトンとしているハジメの頭を撫でて少し困った顔をするクラウ。それにハジメは苦笑いをするしかなかった。バカな親友が名付け親な上に神様になってる事に対してだったが。

## 0～3歳児の考察と衝撃の事実（後書き）

ハジメ、大地に立つ。

3歳児までに知った自分の周りの事と思わぬ名前の由来。色々設定がザツクリなのはご愛嬌ということ。もっと正確に伝わりやすくすることが課題ですね。がんばりましょう。

## 5歳児が聴く自分の種族について（前書き）

2011/12/19 家政婦の2人がさん付けだったので直しました。

## 5 歳児が聴く自分の種族について

「ハジメ坊ちゃん、朝食の準備できましたよ。起きてください。」

「ん・・・は～～い・・・。」

「ほら、そう言っただけで起きる気0じゃないですか！ちゃんと起きてください！」

家政婦のヒルエに上半身を起こされやっと目を開ける。眠りを貪りたいと訴える体を無理やり動かしてフラフラ立ち上がるのを確認してヒルエさんは部屋を出て行く。

「ふあ～～～～・・・ねむ・・・。」

ヨロヨロしながらもダンスに向かい寝間着から普段着へと着替える。茶色のズボンに白いシャツと紺色のベスト、革のブーツを履いて壁に掛けてある鏡で身だしなみをチェックする。黒い髪、目は黒だが光に当たった時よく見ると紫色になっているので限りなく黒に近い濃い紫なのだろう。これは父も母もそうだった。じっくり見ないと気付かないが。

顔立ちはずすがあの両親の息子という整った顔立ちでまだ5歳だが将来はイケメンになるのだろうかなどとハジメは考えていた。ここにサイトー（過去に好きだった娘がイケメンと付き合っていた事がありアンチイケメンになった前世の親友）がいたら「イケメンマジ死ねっ！」と掴み掛ってきたらうなとニヤニヤしている自分の顔に気付くすぐに元に戻して部屋を出て食卓のあるリビングへ向かう。

「おはようございます。」

「やあハジメおはよう！」

「おはようハジメ。」

「おはようございます坊ちゃん。」

「おはようございます。朝食は用意できてるんで顔洗ってきてくださいまし。」

「おはようございますハジメ坊ちゃん」

ドアを開けて挨拶すると父、母、ラウ、モルヒラ、ヒルエと挨拶が帰ってくる。モルヒラに促されるままりビングを抜け隣のキッチンに入り外の井戸に向かう。丁度裏庭にあたる場所にある井戸で顔を洗いすぐ近くの馬小屋から顔を出す黒い馬に声を掛ける。

「クロ、おはよう。」

「ヒヒンッ」

鬣が火のように揺らめいている黒い馬は名前をクロフレイアと父から教えてもらったがクロと呼んでいる。クロが嬉しそうに挨拶してくるのを確認して家の中へ戻る。テーブルには朝食が準備されラウがハジメの席のイスを引き座らせるとラウと家政婦の2人も席に着く。食事は皆でするのは昔からのルールらしい。ラウに聞いたところ世間的には家政婦や執事が一緒に食事するのは珍しい事らしい。日本の一般家庭しか経験のないハジメにとってはむしろこちらの方が普通だったのでなんの違和感も感じなかった。

食事を終え片づける為に家政婦の2人やラウが席を立ち、ハジメも席を立とうとするとオルタスが話しかけてきた。

「ハジメ、今から大事な話があるから聞いてくれるか？」

「え、あ、はい、わかりました父上。」

浮かせた腰を下ろしオルタスを見る。オルタスの隣に座るクラウもこちらを見つめている。何があるのだろうと考えているとオルタスが再び話し出した。

「ハジメも5歳になったわけだし、色々話しておかなきゃいけないこともあつてね。もちろん今すぐ全部理解しなきゃいけないわけじゃない。わからなかった事はその都度詳しく教えるからいつでも聞いてくれて構わないからね。」

「はい。」

「よし、それじゃまずは・・・オレ達の事から話そうかな。まあ正確にはオレとハジメなんだけど。」

どんな事言われるのか緊張して聞いているハジメ。オルタスは普段と全く変わらない口調でハジメの目をじっと見てゆっくりと話す。

「オレとハジメは人間じゃない。魔人って言われる種族なんだ。」

いきなりのカミングアウトに思考が止まる。だがオルタスはそのまま話し続ける。

「まあ見た目は人間とほとんど変わらないしね。たぶん言われなきゃ気付かなかったんじゃないかな。でも間違いなくハジメは魔人だよ。その眼がその証拠さ。」

そう言うとハジメの眼を指さす。指を差されて我に戻るハジメは聞いた事を頭で繰り返し理解しようとする。そして疑問に思ったこ

とを口にする。

「母上も同じ眼なのに違うのですか？」

「お、いい質問だね。さすがハジメだ。」

そう言っ一人でウンウン納得しているオルタス。クラウの先を促す視線に気付いてその答えを話す。

「クラウは元人間といえいいかな。魔人の特徴に、魂の共有とというのがあってね。愛する人と一生添い遂げる為に魂を一体化させて分かち合うことができるんだ。これを見ると寿命の長い方、つまり魔人の寿命に合わせられるんだよ。普通に生活してれば間違いなく魔人の方が長生きするからね。」

そう言っオルタスはクラウを見る。クラウはニッコリ微笑んでハジメを見つめる。

「共有すると相手が違う種族の場合目が魔人と同じ色になる。魔人はまたちょっと特殊な目なんだけど。まあその辺は後にして。あと共有できるのは一生に1回だけ。だから愛する人と一生を添い遂げる為なんて言われてるんだね。なかなかロマンチックな種族だろ？さて、この辺まででなにか質問はあるかい？」

突拍子もない話の連続でついていけなくなりそうになるが、とりあえずそういうものなんだと無理やり理解して気になった事を聞く。

「魔人は寿命が長いって言ってましたが具体的にどれくらいなんですか？」

「あゝ魔人の方が寿命が長いって言い方はちょっと違うか。正確には寿命がないんだよ。」

「は？」

「ある程度歳を取るとピタリと成長が止まってね、あとはず〜と歳を取ることはない。でも死なないわけじゃない。怪我や病気が原因で死ぬこともあるし、あくまで老衰することがないってだけだね。あ、老衰ってのは歳を取ってお爺さんになることだね。」

それでも十分すぎるだろう！と思わずツツコミを入れそうになるのを堪える。さらにオルタスは付け足す。

「あとこれがとても重要なんだけど、魂の共有くをした後に自分が相手が死んでしまうと同時に死んでしまう。共有しているのだからね。だからもしハジメが魂の共有くをしたら自分が死なないようにする上に相手をしつかり守らなきゃいけないよ。してなくても女性を守るのは男として当然の義務だけどね。」

そう言ってニッコリ笑顔でグツと親指を立てるオルタス。話の内容はハードな気がするがオルタスのおかげで重く受け取らずに済んだのはハジメにとってありがたいかつたかもしれない。

「魔人の目が特殊というのはどういうことですか？」

「あ、それはね、実際にやってみるのが早いね。」

そう言うとオルタスはテーブルの上に手を出す。すると手から紫色に光る靄のようなものが出て掌の上で渦巻いている。回転が速くなったかと思ったら火が出て燃える球体になった。ハジメは初めて見るおそらく魔法であろう現象に驚き、オルタスの顔を見てさらに驚いた。オルタスの目が淡く紫色に輝いていた。

「こんな感じで魔力を使うと体の中を魔力が巡り目が輝きだす。使う魔力の量が多ければ多いほど輝きが増すって仕組みかな。オレ達

の姓がアメジストって言われるのもこれのおかげだったりするんだけどね。」

「なるほど。」

前に初めてオルタスに姓がアメジストだということを聞いたとき疑問に思った事だった。前世の記憶で紫色の宝石というのはなんとなく覚えていたがなぜそんなものが姓になったのか。それが魔人特有の目からきていることに納得するハジメ。

そして話を聞いている途中から聞くことが迷った質問を思い切っただけで聞いてみることにした。今なら並大抵のことは驚かない気がしたので深呼吸してから疑問を口にする。

「父上と母上って何歳なんですか？」

「む、ハッキリとはわからないけど300歳くらいかな？」

「それくらいかしらね。」

そう言ってお互いを見つめて笑っている2人を見て眩暈を起こしそうになるハジメだった。

## 5歳児が聴く自分の種族について（後書き）

ちょっと短いかもしれませんがここで区切った方がいいような気がしたので。

ここでやっと姓を公開。出すの忘れてたわけではないです。決してないです。でも出す機会あってよかったですマジで。

## 5 歳児が聴く核人についてと明日からの話

「さて、自分達がどんな種族かというのはこれくらいかな。他にも色々あるけどその辺は追々話すとして。」

オルタスが一度話を区切り次の話を切り出す。ハジメはまだ自分の事で知らない事があるのかと気を引き締めるがふとオルタスの斜め後ろにラウが立っていることに気付く。こちらの視線に気づきラウは笑顔で軽く頭を下げてきたのでどうしたんだろうと首を傾げる。オルタスはそのやり取りを見た後口を開く。

「そう、ラウの事だね。ラウも人間とは違うんだ。」

「魔人なのですか？」

「いやいや、ラウは魔人じゃないよ。核人かくひとと言って、うーん、どう説明すればいいか。普通の生き物とは全く別つて言えばいいのかなあ。魔晶石という自我を持つ石があつてね。魔晶石は魔力を蓄える性質がある。ある程度蓄えるとその魔力で体を構成して生き物の様になるってわけさ。」

「えっと、じゃあラウのあの姿は魔力の塊つてことですか？」

「そういうことでございます。坊ちゃん。」

そう言つとラウは右手を胸の高さまで上げると指先から蒸発したように消えていった。ハジメの驚いている顔を確認すると反対の手でサツと隠し次の瞬間には消えたはずの指が元通りになっていた。マジックの様な仕草をするせいでどっちなのか混乱しだすとラウは説明を始めた。

「核人の体は魔力そのものですので魔力さえあればいくらでも再生は可能でございます。大まかな外見はそれぞれの核によって決まっ

てますが服などの部分は個人の趣向とお考えくださればよいかと。魔力をどうやって蓄えるかですが、漂う魔力を吸ったり、先ほどの様に食事を取って食べた物を魔力に換える、後は仕える主に魔力を分けてもらう。そうしたこと蓄えております。」

「仕える主？」

「はい、核人は自分の力だけで変化できるほど魔力を蓄える事はほとんどございません。ですので変化できるほど魔力を注いでくれた人物に感謝し仕える事が多くございます。核人と主の相性など様々な理由でそうではない場合もあります。」

「ラウは父上に感謝して仕えてる？」

「はい、この大恩は返しきれないものと思っております。」

「いやいや、大げさなんだよラウは。」

照れたオルタスは頭を掻きながら手を振る。そんな2人を見て笑顔になるハジメとクラウ。

「ラウも長生きしてるの？」

「そうですね、石ですので歳を取ることにはございません。主やクラウ様と同じくらいとお考え下さればよろしいかと。」

そう言われたが見た目は両親が20代後半くらいなのに対してラウは40歳くらいなので同じは無理があるだろうと思ったが見た目が実年齢に全く関係ない事を考えたらなんととも言えないなと考えを改める。

「クロフレイアも同じくらい生きております。彼女も核人でございますよ。」

「え？クロも？馬だけど？」

「核人という名前ですが、変化後にどんな生き物になるかは千差万別です。馬であったり、中には昆虫のような者もおります。生き

物ですらない者もいるとか。私はまだ見た事がございませんが。」

「な、なんでもありませんかね……。」

「あと核人にはそれぞれ固有の特技がございます。」

そう言うつとハジメの方へ来て掌を出す。そうすると掌の上に黒い円が出てきてそこからカップが出てきた。赤ん坊の頃から見ているマジックかと思ったが、いつもはサツと反対の手などで隠した瞬間に出てたりしていたので実際掌から出てきているとは思ってなかった。3人分のカップを出して両親とハジメの前に置くのと今度はポットを出す。カップに注がれる紅茶からは湯気が立っていた。注ぎ終わるとポットを掌に載せる。また黒い円がでてポットが中に入った後円が消える。

「こういうことでございますね。」

「え〜と……どういうこと？」

「これは失礼しました。では詳しく説明を。私の特技は収納と申しますか、別の空間に物を出し入れできるのでございます。どれだけでも物が入りますが、空間に入れたい物が掌に載る事と生き物以外という条件がございますね。空間に入っている間は時間が止まっているので劣化したり腐ったりすることもございません。」

「だから紅茶も暖かかったんだね。」

「そういう事でございます。」

ラウがニコリと頷く。空間に入れた物を忘れちゃうことはないか聞くと、空間の中に何が入っているかはちゃんと把握しておりいつでも自分の出したい物を出せるということだった。

「クロも特技あるの？」

「あるにはあるのですが、クロフレイアの特技はあまり生活向きではないと申しますか……。」

「へえ、何だろっ。教えてよラウ。」

ファンタジー特有の事に子供の様に（実際子供だが）興味津々なハジメに申し訳なさそうにラウは口を開く。

「クロフレイアの特技は自分を中心に周りを火の海に変えることのでございます。」

「……………」

思いもよらない特技にハジメは笑顔のまま固まってしまっ。

「もちろんクロフレイアは大変賢い馬ですので無暗にそんな特技は使いません。坊ちゃんを怖がらす事もしないのでご安心下さい。」

「う、うん。」

ビックリはしたがその特技を聞いてクロが怖いとは思わなかった。クロと今まで接してきたが怖い思いをすることはまったくなかった。話しかけると理解しているように鳴き声を出すし、ハジメを見るクロの目も優しい目をしていたのでハジメはクロの事が好きだった。

「よし、それじゃラウとクロフレイアの話はこの辺にして次の話をしようかな。」

ずっと黙って聞いていたオルタスが口を開いた。ラウはスツとオルタスの後ろに下がる。それを確認するとオルタスは話を始める。

「まだハジメは5歳だし、家と村の中くらいしかいることないけど

それ以外の所はとても危険な所というのはわかるね?。」  
「はい。」

これはずっと前から言われている事だった。家や村の周辺は比較的安全だが、森の中にはモンスターと呼ばれる生き物が沢山いる。実際村人が森に入ってケガをしたというのも聞いていたし、定期的に村人数人で狩りをして食糧や生活用品の材料にしているのも知っていた。狩ってきたモンスターを見たが鋭い牙や爪を持った熊の様なものもいて子供なんて到底勝ち目のないものだった。

「だからハジメには明日から鍛錬を積んでもらおうと思ってるんだ。あ、体を鍛えて強くなるうってことだね。」

「強く?」

「ハジメも男の子だ。みんなを守れるくらい強い方がいいだろう?」

「はい、そう思います。」

転生前は体を鍛えるなんて特に考えてもいなかったがそれは必要のない生活を送っていたせいだ。だがここはそれでは済まない。自分の身にいつ危険が訪れるかわからないし、周りの人々にも同じ事が言える。5歳まで暮らしたが両親はもちろんラウやクロ、村人達もいい人ばかりで愛着があり大切な人達だとハジメは思うようになっていた。

「よし、それじゃ鍛錬の内容だけど魔法と武器の扱いと色々な戦闘技術、あと体力作りかな。それに勉強もしなきゃいけないね。」

「いっぱいありますね・・・。」

「魔族は魔力は必ず抜けてるのだけど体力とかは普通の人間くらいかそれ以下だから武器を使った接近戦はあまり得意じゃないのだけれどね。実際オレはそういうのはからつきだし。」

「そういうものなのですか。」

そう言われたが5歳のハジメにはいまいち実感がなかった。

「たぶんハジメは魔人と人間のハーフだから普通の魔人より体力は付くと思うんだ。それに成長できる間に鍛えておけばそれを維持できるだろうしね。オレは成長期にそんなに鍛えられなかったから。」

オルタスはそう言うと言ったのか苦笑いをした。

「で、誰が教えるかなんだけど魔人の使う魔法は人間のとはちょっと違っててね。これはオレしか教えられないから魔法担当はオレだね。で武器の扱いなんかは村のドルガンだね。彼は村の子供達にも教えてるからそこで一緒に習うからね。」

ドルガンは村の警護をしている人で30歳くらいの男。肌は日焼けして浅黒く、身長は180cmを超え、一見怖そうだが愛嬌のある顔をしており豪快な笑いがピツタリで村では人気者だった。体は鍛えられていて色々な戦闘技術を知っていることから子供や若者相手に村で道場を開いていた。道場と言っても建物があるわけではなく村の隅の空地でやっているのだが。村の子供達とは村に行っただきよく遊んでいるので一緒にやると知って嬉しかった。

「毎日道場があるわけじゃないからそれ以外の日はラウに鍛えてもらおう。」

「ラウ？」

「私も人並み程度には戦う技術はありますのでご安心ください。」

ラウが戦うイメージはまったくなかったので首を傾げるとラウはそう言って一礼した。

「それで最後の勉強担当はクラウだね。」

がんばりましようねとクラウが微笑むが、勉強と聞いて高校生時代の勉強を思い出しちよつと敬遠したい気分だったが自分が5歳児だということを思い出し心の中で苦笑した。

道場が3日に1回午前中にあるという事なので父とラウも3日に1回午前中にやることになり、クラウとの勉強は2日に1回午後やることになった。明日は道場があるので父と一緒に朝村に行くことになった。

## 5歳児が聴く核人についてと明日からの話（後書き）

家政婦以外人間じゃなかった。という話です。

次回は新しい登場人物が何人かでてきます。詳細はこれから考えるのですが。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5166z/>

---

ジュエル！

2011年12月20日00時51分発行